

Z会東大進学教室

高1 東大国語



【問題】(演習)

出典：長谷川眞理子『科学の目 科学のこころ』／筑波大・04年

文章略解

行動生態学において、過去における投資の大きさこそが将来の行動を決めると考えることを「コンコルドの誤り」という。これは、超音速機「コンコルド」開発のエピソードにちなんで名付けられたものだが、将来の行動に関する意志決定が過去の投資の大きさによってしている点で誤りであり、本来、意志決定は将来の見通しと現在の選択肢によらねばならない。例えば、動物が求愛行動をずっと続けるのは過去の投資が大きいかと考えるのは人間の思考における誤りであり、動物には他の選択肢がないのかもしれないと考えるべきなのである。人間が犯しがちなこの誤りには、人間の思考形態に深くかかわるものがあるように思われる。

解答

問1 一羽の雄鳥が長い時間をかけ多くの餌を雌にあげて求愛行動をしたにもかかわらず見返りが期待できない時に、雄鳥は過去の投資を無駄にするわけにはいかないので求愛を続けるだろうと考えること。〔90字・解答例〕

問2 何人もの兵隊の死を無駄にすることはできないという理由で誤った作戦を続行したり、科学者がこれまで自分が大量の投資を行なってきた理論を捨てたくないという理由で誤った旧パラダイムを捨てなかつたりすること。〔99字・解答例〕

問3 人間は過去の投資の大きさによって意志決定をし、動物は将来の見通しと現在のオプシオンによって意思決定をするという違いがあると考えている。〔67字・解答例〕

問4 動物の行動を方向付ける将来に対する意志決定は、将来の見通しと現在のオプシオンによるものであるが、人間は意識的な思考をすることにより、それを過去の投資の大きさによると解釈してしまう過ち。〔92字・解答例〕

問5

(ア)
(エ)

出典：今村仁司『近代の思想構造』／早稲田大学・教育学部・00年・改

文章略解

日常生活は、任意の記号的事件の消費行動である三面記事的驚きから生まれる、神話的・想像的な幻影的物語の世界である。その世界と手を切るとき真実の驚きが生まれる。真実の驚きは、「考える」の生誕の場所であり、世界が存在することそのものに驚くこと、いわば自明性への驚きであり、神話的・幻影的世界を解体する。驚く能力を開発し復活させる態度は学説は異なってもここ二百年の哲学精神の共有財産であった。命題や主張は古びても、驚く能力は永遠である。

解答

問1 (ア)〃切断 (イ)〃救済 (ウ)〃崇高 (エ)〃基礎

問2 a〃ない b〃ない c〃ある d〃ある e〃ある 問3 自明性への驚き〔25行目〕

問4 世界自体を問い考える傾向を封殺する〔12行目〕 問5 (ウ) 問6 (オ)

問7 驚きがなくては必要である〔15行目〕 問8 二

解説

問2 第五段落の始めて¹「思考の驚きは、自明性への驚きである」と述べ、それは第一段落で述べている²「真実の驚き」のことを言い換えたものである。そしてさらにこの自明性への驚きというものが³「当たり前前にあることに驚くこと」であって、「ないことに驚くこと」ではないと説明されている。このことをふまえて、「ある」と「ない」を入れていく。

a 普通人が驚くのは「ない」ことに対してなのか、「ある」ことに対してなのか、を右の傍線部3と照らし合わせて考える。

b・c 「なぜ **b** のではなくてなぜ **c** のだろうか」と述べている内容と同じ内容が、直前にある「何もないことではなくて、むしろあることが問題である」のところで、ここと右の傍線部3が一致していることを参考にして考える。

d 自明であるのは「ある」ことの方か「ない」ことの方かを、これも右の傍線部1と3の関係から考える。

e 「本来の驚き」とは右の説明の傍線部2のことであり、その驚きが「ある」ことに驚くことか、「ない」ことに驚くことか、を右の説明の2と3の関係から考える。

問3 「真実の驚き」は、三面記事的驚きではなく、第二段落で述べられているように、「世界が存在することそのものに驚く」ことである。そしてこの驚きは、思考の動力を生み、「思考の驚き」となる。この思考の驚きについて第五段落の始めて「自明性への驚きである」と言い換えているので、六字以上、十字以内の字数制限に合わせて「自明性への驚き」が正解となる。

問4 筆者の言う「神話」とは、第六段落にあるように、「自明な世界、自明な考えかたを固定する」ものである。そしてこの神話(的精神)から切斷したところに「思考の動力」が生まれるのである(第二段落)。「催眠にかける」とは、この「思考の動力」が生まれないように、神話的精神を持ち続けさせることを言うのであり、そのことを端的に述べているのが、第二段落の「世界自体を問い、考える傾向を封殺する」の部分である。

問5 傍線部③の能力とは、直前に述べられている「世界自体を問い考える傾向を封殺する」神話的精神、幻想と想像の物語を解体する能力のことである。それは、言い換えれば第五段落に述べられている、『『日常的に慣れ親しんでいること』に驚くこと』であり、これと一致しているのは(ウ)である。

(ア) 後半の「極めて幸福な奇跡として考えることのできる能力」が論旨に合わない。ここが「疑い、驚くことのできる能力」と述べてあれば、筆者の論と一致する。

(イ) 「皮相な驚き」が世界を構成しているという論は文中のどこにも述べられていない。

(エ) 見世物的びつくりから覚醒することは、第五段落にあるように、「知性の酷使と激しい精神労働なしには」おこりえないことであり、「本能」とは逆のものである。

(オ) 「我々を取り巻く世界」が「非日常性に満たされた特異で神秘的なもの」であるという内容自体、文中に述べられていないことである。

問6

傍線部④の「この循環」が指しているのは同一段落（第三段落）の始めに述べられている「驚きがなければ『考える』はない。

しかしその驚きを発見するためには『考える』が必要である。これは循環である」の部分である。そしてさらにそれはその後で、「それ（循環）は決してたんなる矛盾ではない」と述べられ、最終的には第三段落の終わり「知性（理性）と驚きはひとつである。」と言い換えられている。この言い換えの部分の端的に表現したのが、第六段落の始めにある「知的な驚き」である。それは「自明的な日常的世界からの目覚め」であり、「自明な世界、自明な考えかたを固定する神話の解体」をなすもので、「自明性の殻の破壊を目指し、より新鮮に驚く能力を開発」するものである。この内容と一致しているのは、(オ)である。

(ア) 第六段落の後半で哲学的知識や学派よりも重視されているのは、「幻想と神話からの目覚めと解放のための驚く能力」の方なので、(ア)は×。

(イ) 第四段落で宗教的知識や、美意識・倫理観は「神話的でイデオロギー的な物語」になると述べられているので、生産的な循環とは逆である。

(ウ) まぎらわしい選択肢であるが、循環そのものが生産的であるのではない。傍線部④の前に述べられているように、人間は世界のなかで生きるときの基本的在り方としてこの循環からまぬかれることはなく、物を考えるとき、この循環を生き、その生きているただ中で知性を酷使し、激しい精神労働をし、自明的、日常的世界から離脱し、神話を解体してゆき、自明性に対してより新鮮に驚く能力を開発する（生み出す）ことを指して「生産的」と述べているのである。

(エ) これも(イ)と同様に、「神話的でイデオロギー的な物語が生産」されることは、神話を解体する力を生む循環とは逆である。

問7

傍線部⑤は知性（理性）と驚きとの関係について述べており、それは循環の関係でもある。この循環の部分をも具体的に述べているのが第三段落の始めの「驚きがなければ『考える』はない。しかしその驚きを発見するためには『考える』が必要である」の部

分である。この問題は問6で考えた筋道を逆にたどる問題である。

問8 挿入文中にある「見世物的びっくりではない驚き」とは、第一段落と第二段落とにある「真実の驚き」のことであり、この「真実の驚きをどうしたら経験することができるのか」という問いかけの答えは、第三段落中の「この驚きをみいだすために、思考の努力がある」の部分である。従ってこの挿入文は、第二段落の後ということになる。

出典……田中克彦『名前と言葉』／九州大学

文章略解

私たちが子どもにことばを身につけさせようとするときは、子どもにとって印象ぶかく関心のもてるモノを実際に見ながら指さして覚えさせるのが自然である。だが、家の中だけで育てられた子どもは見るモノの数も限られてしまうため、モノの名をまずは固有名詞として覚えてしまい、次いで、似たようなモノをいくつも見ることによって普通名詞への認識に到達する。このため、子どもにおいては固有名詞と普通名詞の境界はつけにくく、固有名詞を普通名詞ととらえてしまう現象が起こる。興味ぶかい例としてクレオール語であるトク・ピシン語の「メリ」が挙げられるように、この現象はおとなの世界にも見られることである。

解答

問1 自分の母語として既に知っているモノの名前

問2 こどもはモノの名前を指さして覚えるので固有名詞か普通名詞かの区別ができず、そのためそのモノの名は固有名詞であろうが、ただの「名前」として機能し、他の普通名詞と同じように使われてしまうという現象。

問3 トク・ピシン語で「女」にあたる語のメリは固有名詞であると言えるのは、トク・ピシン語が植民者の言語と先住民の言語が混ざってできたクレオール語であり、「女」を表すメリも元々は白人の言語における人名、つまり固有名詞の「メリ」を先住民が「女」一般を指すと思ったことから成立した言葉であるという歴史的背景を知っての上であるということ。

- 問4 ① 概念 ② 洞穴 ③ 請 ④ 澄 ⑤ 唯一

特別問題

(ア) こどもはオトや手ざわりなどをそなえた印象ぶかいものに興味関心をもつため、そこからことばを身につけていくのが自然なのに、親が無理矢理オトも動きもないようなモノの名から覚えさせようとするのは、こどもの興味関心を全く無視した結果になってしまうから。

(イ) オトなどの感覚を通してモノの名を覚えていくことが本来の知の育成であるのに、知育道具の名を覚えさせることで学習の一步を踏み出したと考え、高度な知の育成がなされると思い込んでいる親への皮肉。

出典：開高健『裸の王様』／三重大学

文章略解

画塾を開いているぼくは、裕福な家庭の子の太郎が、家庭で抑圧されているためか、塾でも頑として画を描こうとしないので、何とかそのきっかけを作ってやろうと、さまざまな働きかけを試みている。ある日、エビガニの話から、ぼくは太郎の心にくさびを打ち込むことに成功したように思った。

解答

問1 叫びという肉体の衝動的行動が、閉ざした心を開かせたから。〔28字・解答例〕

問2 スルメで釣〔79行目〕

問3 昨日のかいほりの興奮と喜びが今でも消えずに残っていること。〔29字・解答例〕

問4 外部に何の興味も示さなかった太郎が、確かな意志を示したから。〔30字・解答例〕

解説

問1 まず、少年が、何から救われたのかを押さえておく必要がある。傍線部(a)の前の段落を読むと、「まるで画を描こうとしない……ときほぐしたことがある。」「この子は……自分で描くことを知らない、憂鬱なチューリップ派だった。」とあることから、この少年は、自発的に絵を描こうとしない子供であることがわかる。それがこの叫びを境に「……彼は画を描いた。肉体の記憶が古びないうちに描かれた画は鋳型を破壊して……」とあるように、憂鬱なチューリップ派をすっかり抜け出している。つまりこの叫

びによって、画が描けない、ということから救われたのである。ではなぜ、救われたのか。ここでの叫びはその直後に「肉体の記憶」とあるように、体の底から沸き起こる、ほとばしる衝動である。そのこみ上げてくるものが、彼の心の殻を破ったのだ。画を描くという行為は、いってみれば自己表現である。それができないということは、心を閉ざしているということと同義である。従って、「叫び」によって心を開いた少年は、画を描くことができるようになったのである。このことを「救い」と言っているのである。

問2

傍線部(b)の直前までに、太郎の言葉は一切書かれていない。始終無口で無反応である。この傍線部で、「小さなつぶやき」を「耳にする」と書かれているということは、太郎に変化があったことになる。傍線部の直前の「ブランコ」のエピソードでもあるように、強い恐怖を感じてさえ「叫び」もあげなかった太郎の初めての言葉である。それほど重みを持つ言葉ならば、言った言葉が引用されていないのは、話の構成上からも不自然だと推測されよう。それならば、この「小さなつぶやき」を耳にしたことは、一つのトピックスとして描かれているはずだと考えられる。そこで、傍線部の次の段落を見てみる。

ここは「ひとりかわった子がいる」という人物紹介になっている。「太郎」ではないが、トピックスにおける『キー・パーソン(鍵を握る人物)』の可能性がある。この後の段落を続けて見てみる。この「かわった子」のエピソードになっている。「エビガニ」の話だ。この子に対して、果して「太郎」がアクションを起こしている。「すると、それまで」で始まる段落である。この段落の中に、次のように描かれている。「ぼくのそばをとおりながらなげなく彼のつぶやくのが耳に入った」ここで「太郎」がつぶやいている。その次には会話文が出ている。これが「太郎」の言葉の引用である。よって、その冒頭の五文字を抜き出せばよい。小説の構成として、重要なエピソードの提示の代表的なパターンなので、このような話の続け方を覚えておくとよい。この構成を図式化すると、次のようになる。

○ トピック・エピソードの効果的な提示パターン

・ エピソードの中心となる出来事を簡単に示す。……いわば『予告』に当たる。



・ このエピソードに関係する主要な人物の紹介。……『キー・パーソン』の提示。

←

・ エピソードの発端を紹介して、時間軸に沿って展開。……エピソードの本体。

←

・ エピソードの中心を直叙する。……いわばエピソードのクライマックス。『予告』部分の実際の出来事が提示される。

問3

傍線部(c)の直後に、この様子が具体的に描写されているので、これを押さえると「彼の頭のなか……ひしめいていた」「紙をひったくると、うっとりした足どりで」「彼は……ため息ついて」「雄弁をふるった」などが目につく。これらのことから、ここで「酔う」というのは、「陶醉」の意味での「酔う」であると判る。つまり、何かに深く心を奪われて、興奮したりうっとりしたりすることである。文章に即してこの心情を具体化すると、この少年は、昨日兄といっしょに小川でかいほりをした興奮が覚めやらないでいるのだが、この状態を「酔う」と表現しているものと考えられよう。

問4

まず「鍵」の正体を捉えることが先決だ。傍線部(d)まで読み進めていけば、もう一箇所「鍵」という言葉があったことに気付いているはず。「スルメで釣ればいいのに……」という、トピックの部分の次の一文にあつたはずだ。「ぼくは小さな鍵を感じて……」とある。この「太郎」の「小さなつぶやき」が「鍵」になっている。「鍵」が何を意味するのかは、この「つぶやき」が何を意味するのかに通じることになるわけだ。そうすると、この「つぶやき」が「ぼく」にとつて持つ意味を捉える必要がある。そこで、この「つぶやき」を軸として、「太郎」との状況を、それまでの描写から捉えることになる。まず、その前に「ぼく」の役割を明らかにしておく必要がある。第一段落の後半部に「ぼくは子供に画の技術を……暗示を投げる」とあることから、「ぼく」は画を通して、子供たちの「こわばり」をときほぐし、内部に埋もれているものを引き出すことを行っていると掴めよう。「電車を一台きり描いて筆を投げた子供」「まるで画を描こうとしない憂鬱なチューリップ派の子供」「抑圧者の名前を書き散らしてから画筆をとった少女」などのエピソードが、このことを示している。ここにおいての「ぼく」の考えは、「いつもおなじ手口で成功するとはかぎらないが、……きつと突破口は発見される」という点にある。「ぼく」が第一に考えているのは、「突破口の発見」＝「鍵」を見つけることである。

さて、「太郎」の場合は、「何日たつても画を描こうとしなかった」「内心のその機制を覗きこむ資料を……あたえられていなかった」「ほとんど無口で感情を顔にださず、……イメージを行動に短絡することがない」「彼の内部で発火するものはなにもない」のであり、「ぼく」は「まったく手のくだしようがなかった」のである。が、これには「小さなつぶやきを耳にするまでは」という条件が付いている。よって、この「小さなつぶやき」≡「小さな鍵」は、小さな「突破口」の発見だと言えるわけだ。この「突破口」は本文では、「脱出法」とも呼んでいる。何から「突破・脱出」するのかというと、本文から、「抑圧者≡鑄型」からの「突破・脱出」と判る。「太郎」にとつての「抑圧者≡鑄型」は、本文の「ぼくは大田夫人の調教ぶりに……」「大田夫人が彼に訓練を強制し、……支配している」などという部分から、「大田夫人」「すなわち「太郎の母」だと掴めよう。何を「突破」させるかは、本文から「内部で発火」する「感情」だと掴めるはずだ。

これらのことから、「鍵」というのは、「内部で発火する感情を鑄型となつている抑圧者から突破させるための手段・方法」だとまとめられる。なお、「鍵」という言葉を比喩的に使つた場合、「なにかしらの困難な状況などを打開、解消するためのきつかけとなる手段・方法」という意味になるようである。「この問題を解くための鍵は……」と使われる場合が、これである。これを加味すると、この「小さな鍵」というのは、「太郎の内面に隠されている感情を引き出すことを邪魔しているものを打ち破るきつかけとなる手段」であり、それは「ほんのわずかなきつかけ」であるものと考えられよう。

「太郎」のほんの一言を「感情を引き出すきつかけ」として捉えた「ぼく」は、「太郎」のところへゆき、「単刀直入にきりこんだ」のだ。今まで「ほとんど無口で感情を顔にださ」なかった「太郎」が「やがて顔をあげると、キツパリした口調で」答えている。これに対して、「ぼく」は「にがい潮」ともいふべき「理屈」を言つてしまった。「貝（≡太郎）は蓋（≡殻）を閉じてしまふ」と思ったが、「太郎」は「せきこんで早口にいった」。そこには「はつきりそれとわかる抗議の表情があった」のである。つまり、初めて「太郎」は「表情」≡「感情」を表したのだ。文中の比喩でいうなら、「貝（≡太郎）は蓋（≡殻）を閉じ」ずに「開いた」のである。「鍵がはまってカチンと音をたてる」というのは、「鍵が開いた」ことを意味する。この「鍵」の意味が、「太郎の内面に隠されている感情を引き出すことを邪魔しているものを打ち破るきつかけとなる手段」であるならば、これは「感情を引き出すこと」に成功したのだと言えよう。なぜ成功と判るのか。それは「感情が出たから」である。どこから「感情が出た」と判つたのか。「キツパリした口調で」「はつきりそれとわかる抗議の表情」によつてである。「キツパリ」「はつきりそれとわかる」というのは、言い換えれば「確かな」といえよう。すなわち、「たしかな手ごたえがあった」のだ。「口調」や「抗議」は「意志」

の表明と考えるとよいはずだ。

従って、この直接の解答は「太郎が確かな意志を示したから」のようなものになるだろう。これでは字数が足りないので、「太郎」についての説明、つまり、「ほとんど無口で感情を顔にださず、イメージを行動に短絡することがない」「彼の内部で発火するものはなにもない」を要約して加えてやればよい。そうすると、解答例のような答になるだろう。

【問題】(演習)

出典…本居宣長『源氏物語玉の小櫛』〈巻二〉の一節 / オリジナル問題

現代語訳

たくさんのお物語書の中で、この物語（『源氏物語』）は、特に優れてすばらしい作品であって、総じてこれ以前にも以後にも、並ぶものがない。まず、これ以前に書かれた古い物語は、何事についても、それほど深く、丹念に書いているとも思われず、ただ通り一遍で、あるものは珍しくおもしろいことを主旨として、おおげさな描写が多く書かれてあったりして、どれもこれもしみじみとした情趣といった方面は、それほど詳しく深いところまで達していない。一方、これ以後の物語では、（例えば）『狭衣物語』などは、何でもすべてこの（源氏）物語の趣向を見習って、丹念に書いているとは思われるが、（内容は）たいそう劣っている。その外（の物語）もすべて（これと）同じである。ただこの（源氏）物語が、このうえなく（すばらしく）て、ことに（趣）深く、万事に丹精をこめて書いているものであって、すべての文章の言葉づかいがすばらしいことは、今更言うまでもないことで、この世に生きる人々の様子、春夏秋冬折々の空の情景、木や草のありさま（に至る）まで、すべてにつけてすばらしい描き方である中でも、男と女、各々の人の様子、心の動きを、それぞれみな別々に書き分けて、ほめている部分などでも、皆その人その人の様子や性格にしたがって、一様でなく、よく（書き）分けられていて、（まるで）実在の人を目の前に見るように（その人物が）想像できるなど、並ひととおりの筆の力が、まったく及ぶことのできない書きぶりである（『並の作者が、かりそめにも及ぶことのできるものではない』）。

解答

問 1 (ウ)

問 2 (a) ≡ (ウ)

(c) ≡ (ア)

(d) ≡ (イ)

問 3 ②・③

問 4 なし

問5 源氏物語の文章のことばづかい〔14字・解答例〕

問6
(イ)

現代語訳

昔、愛宕の山に、長い間仏道修行している徳の高い僧がいた。長年修行をして、僧坊を出ることがない。(その僧坊の)西の方に獵師がいた。(獵師は)この僧を尊んで、(僧のもとへ)常に参上しては、物を差し上げたりなどした。(ある時獵師は)長いこと参上しなかつたので、食糧袋に干飯などを入れて、(僧のもとへ)参上した。僧は喜んで、ここ数日来(会えなかつたので)会いたいと思つていたことなどをおっしゃる。そのうちに、(僧が獵師に)にじり寄つておっしゃることには、「最近、たいそう尊いことがある。このところ長年、余念なくお経を大切に読み続け申し上げている御利益であろうか、このごろ毎晩、普賢菩薩が象に乗つてご出現になる。今晚(ここに)泊まつて(普賢菩薩を) 拝みなさい」と言つたので、この獵師は、「(それは)実に尊いことであるようです。そういうことならば、(ここに) 泊まつて拝み申し上げます」と言つて、(僧坊に) 泊まつた。

さて、(獵師は) 僧の召し使つてゐる童子でそこにいた者に尋ねた。「僧がおっしゃることは、どういうことなのか。お前も、この仏を拝み申し上げたのか」と尋ねると、童子は、「五、六度拝見いたしました」と言うので、獵師は、「自分も拝見することがあるかもしれない」と思つて、僧の後ろで、寝もしないで起きていた。九月二十日のことであるから、夜も長い。今か今かと待つうちに、夜中も過ぎたろうと思うところに、東の山の峰から月が出るように見えて、峰の嵐も激しい時に、この僧坊の内が、光が差し込んだように明るくなった。見ると、普賢菩薩が象に乗つて、しだいに現れておいでになり、僧坊の前にお立ちになった。

僧は泣きながら拜んで、「どうです、あなたは(普賢菩薩を) 拝み申し上げましたか」と言つたので、「どうして拝み申し上げないことがありましようか、いや拝み申し上げました。この童子も拝み申し上げています。はいはい、たいそう尊いことです」と言つて、獵師が思うことには、「僧は長年お経を大切にし、読み続けていらつしやるからこそ、その目にだけは(普賢菩薩が) ご出現にな(つて見え)るのだろうか、この童子や自分などは、お経の上下の向きもわからないのに、(普賢菩薩が) ご出現になるのは、納得のいかにいことだ」と心の中で疑つて、「このことを試してみよう。これは罪を得るようなことではない」と思つて、とがり矢を弓につがえて、僧の拝み込んでゐる上から、頭越しに、弓を強く引いて、ヒュッと射たところ、(普賢菩薩の) 御胸のあたりに当たつたようで、火を

うち消すようにして、光も消えてしまった。谷へ鳴り響いて、逃げて行く音がする。僧は、「これはどうなされたのだ」と言って、ひどく泣くことはこの上もない。男〔「獵師」が申し上げたことには、「僧の目には（普賢菩薩が）ご出現にな（つて見え）るだろうが、自分のような罪深い者の目にもご出現にな（つて見え）るので、（この普賢菩薩がまことの仏であるかどうかを）試し申し上げようと、思（つて）射たのです。まことの仏であるならば、まさか（お体に）矢はお立ちにならないだろう。だから（矢が立ったところをみると）怪しいものです」と言った。夜が明けて、血（の跡）を尋ねて行って見たところ、一町ほど行って谷の底に、大きな狸が、胸からとがり矢を射貫かれて、死んで横たわっていた。

解答

問1 ① Ⅱにじり寄っておっしゃる

② Ⅱここ数日毎晩のように普賢菩薩が姿を現すという不思議な靈験を密かに自慢したい気持ちと同時に、久しぶりに訪れた親しい獵師に特別にそのことを教えてあげたいという気持ち。〔いずれも解答例〕

問2 聖は長年お経を大切にし、お読みになっているからこそ、その目には普賢菩薩がご出現になって見えるのだろうが、この童子や自分などは、お経の上下の向きもわからないのに、普賢菩薩がご出現になるのは、納得のいかないことだ。〔解答例〕

問3 どうして拝み申し上げないことがありましようか、いや拝み申し上げました。この童子も拝み申し上げます。〔解答例〕

問4 (イ)

ぞ	こそ			や	なむ	係助詞
候ふ	め	め	なれ	ある	ある	結びの語
連体形	已然形			連体形	連体形	結びの活用形

解説

問1

①口語訳の問題。まず傍線部を品詞分解すると、「ゐより（動詞）／て（助詞）／のたまふ（動詞）」となる。「ゐより」は四段活用の動詞「ゐよる（居寄る）」の連用形。「ゐよる」はワ行上一段活用の動詞「居る」に「寄る」が付いた複合動詞で、「座ったままで近寄る、にじり寄る」という意味がある。「て」は接続助詞で、現代語の用法と同じく単純接続を表す。「のたまふ」は八行四段活用の動詞「のたまふ」の連体形で、「言ふ」の尊敬語として「おっしゃる」という意味を表す。したがって、正解は「にじり寄っておっしゃる」となる。なお、「のたまふ」は下に体言「やう」が続いているため、終止形ではなく、連体形である。そこで口語訳の際には「やう（現代語で「こと」）に続く形で訳すこと。

②読解問題。動作から動作主の気持ちを考える問題。話の場面設定や動作主が置かれている状況を正確に把握し、それらを考慮して気持ちを想像していく。

設問文に「聖のどんな気持ちがうかがわれるか」とあるところから、傍線部の動作主が聖であることは明らか。また文脈から、

聖は訪ねてきた獵師に近づいて話をしたことが読み取れる。

そこでまず、聖の話の内容をみると、要点は「このところ毎晩、普賢菩薩が象になって姿を見せる」ということである。普賢菩薩が白い象に乗っている姿はよく絵に描かれているものの、仏様であるから実際に姿を現すことはまず考えられない。これは非常に珍しく、不思議な霊験であると言っている。聖は、普賢菩薩が現れることについて、自分がお経を大切に思っ心こめて読んでいる、その御利益ではないかと言っている。珍しい体験をすると誰でも人に話したくなるものだが、ここでは自分が仏道に専心しているからこそ普賢菩薩が姿を見せてくれるという、多少なりとも自慢めいた気持ちも含まれていると考えられる。また、聖は獵師に僧坊に泊まって普賢菩薩の姿を見、拜むよう勧めている。これは獵師にもありがたい仏様の姿を拜ませたいという聖の好意によるものと考えられる。しばらくぶりに来た獵師に対して、聖はとてもタイミングがいいと思いい、この機会にもてなしたいという気持ちもあつたであろう。

次に、「にじり寄る」という動作の意味を考えてみる。二人の人間が普通に向かい合って話をする状況と比較すると、「にじり寄る」からは、話相手のそばに近寄って小さな声で話をするといった姿が思い浮かべられる。これは、非常に大切な話、人に聞かれない話をする際にとる行動である。ここでは、仏様に対する恐れ多さもあつて、聖が普賢菩薩の件を大勢の人に触れ回ったと考えにくい。おそらくは僧坊内の人しか知らなかつたであろう。でも、獵師は聖を敬い、常に贈り物をしている。今回も手土産を持つて訪れた。親しく交流し、好意を持つている獵師には、特別にこっそりと話を打ち明けようといった気持ちがあつたと考えられる。

問2 読解問題。登場人物の心理を、文脈をたどりながら正しく読み取ることが要求されている。その上で、さらにここでは口語訳の

力も問われている。まずは本文を丁寧に読みながら、心理描写がどこにあるのかを見つけることである。

そこで、傍線部(c)以降の文中から、さしあたり獵師の気持ちを書かれている箇所を順に抜き出してみる。まず最初は、普賢菩薩の姿を目にした場面で、聖に向かって言った「おいおい、いみじう貴し(「はいはい、たいそう尊いことです)」という言葉である。これは普賢菩薩を尊び、それを目にできた感動の気持ちであり、普賢菩薩は尊いものであるから拜むことを期待した傍線部(c)の気持ちと通じ合うものである。

次は、その直後にある「獵師思ふやう」に続く「聖は、年ごろ……心は得られぬことなり」の箇所である。この箇所を口語訳し

て内容を解釈する。「年ごろ」は「長年」の意。「たもち」はタ行四段活用の動詞「たもつ（保つ）」の連用形で、「守るべきものとして大切にする、保持する」という意味。ここでは、前後に「経」や「読む」という語が用いられているので、「お経を大切に思い、読み続けている」という意味になる。「読み給へばこそ」の「給へ」は四段活用「給ふ」の已然形で、尊敬を表す補助動詞。已然形に接続助詞の「ば」が付いているので確定条件の原因・理由（「～なので」）の意味で下に続いていく。また、係助詞「こそ」は強意を表すと同時に、係り結びの法則によって結びの語を已然形に変える。ここでは、「見え給はめ」の「め」が推量の助動詞「む」の已然形で、結びの語になるが、文がここで終わらずにまだ下へ続いていくために、「～けれども」という逆接の意味が生じる。また、「見え（見ゆ）」にはさまざまな意味があるが、ここでは「（人に）見られる」という受身の意味と考えられる。主語は、尊敬の補助動詞「給は（給ふ）」が用いられているところから、「普賢菩薩」になる。「普賢菩薩が人から見られる」というのは、よりわかりやすく言えば、「普賢菩薩が現れる」ということである。「その目ばかり」の「その目」は聖の目を指し、「ばかり」は「～だけ」という限定の意を表す副助詞である。そこで、ここまでの箇所を口語訳すると、「僧は長年お経を大切にし、読み続けていらつしやるからこそ、その目には（普賢菩薩が）ご出現にな（つて見え）るのだろうか」となる。

さらに続きを見ると、「経の向きたる方も知らぬに」の「たる」は完了の助動詞「たり」の連体形であるが、ここでは存続の意味で用いられている。また、「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連体形で、「に」はここでは逆接の意で下に続いていく。「見え給へる」は先の「見え給はめ」と同様、普賢菩薩が現れる意であるが、「る」は完了の助動詞「り」の連体形。最後の箇所は「心／＼得／＼られぬ／＼こと／＼なり」と品詞分解でき、「心（は）得」はア行下二段活用の動詞で「納得する・わけがわかる」という意味。「られ」は助動詞「らる」の未然形でここでは可能の意味を表し、「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連体形、「なり」は体言「こと」に接続しているので、断定の助動詞「なり」である。そこで、後半を口語訳すると「この童子や自分などは、お経の向いている方もわからないのに、（普賢菩薩が）ご出現になるのは、納得のいかないことだ」となる。

ここに表れている獵師の気持ちは、「納得できない」という言葉が示すように、普賢菩薩に対する疑いである。(b)で感じた少しの疑問よりははるかに強いもので、この後獵師は普賢菩薩の正体を明らかにするための行動に出る。普賢菩薩に対して尊くありがたく思っていた気持ちが明らかに変化している。したがって、ここが求める該当箇所である。

問3 口語訳の問題。傍線部の意味を押さえた上で、文脈を丁寧にたどって省略されている内容を考える。

「いかがは」は、副詞「いかが」に係助詞「は」が接続したもので、「いったいどのように」という疑問や「どうして〜だろうか、いや決して〜ではない」という反語を表す。または疑問表現の形で「どんなにか・さぞかし」という程度のはなはだしさを表す用法もある。

こゝは、「普賢菩薩をあなたは拝み申し上げたか」という聖の質問に対する獵師の答えである。普賢菩薩が象に乗って現れた様子は既にはつきり記されており、また、「いかがは」の後で「この童も拝み奉る」と言っているところから、獵師も間違いなく拝んだと考えられる。そこで、「いかがは」は疑問の意では意味が通じず、確かに拝んだということを言うための、反語を使った強調表現だと考えられる。したがって正解は「どうして拝み申し上げないだろうか、いや拝み申し上げました」となる。なお、「童も拝み奉る」の「奉る」は、ここでは謙讓を表す補助動詞で「〜申し上げる」という意味になる。普賢菩薩に対する敬意を表す語なので、「いかがは」の後に省略された表現を補う際にも用いる必要がある。

問4 解釈問題。批評文を正確に読み取り、本文のどの内容についてのよう批評されているのかを考えていく。

批評文を口語訳すると次のようになる。「僧であるけれど、無知であるから、このように化かされたのである。獵師であるけれども、思慮があったので、狸を射殺し、その化けの皮を剥いたのである」。普賢菩薩は狸が化けたものであることを聖は見抜けなかったが、獵師は見破ったということに関する批評である。その理由として、聖は無知で、獵師はおもんばかりがあると記されている。「おもんばかり（慮り）」は「十分に考えること・思慮」という意味。獵師は、仏の教えに無縁の自分に普賢菩薩の姿が見えるのは納得できないと理性的、論理的に判断し、普賢菩薩の正体を明らかにしようとした。それに対し、長年の仏道修行を積んだ高德の聖は、疑いもせずに盲目的に信じた。ここでいう「無知」とは、現代語で用いられている「知識がないこと」といった意味ではなく、獵師の「おもんばかり」の対義語として、「理性的・論理的ではないこと」を意味していると考えられる。したがって正解はイとなる。他の選択肢を見ると、アで「無知」を「学識がないこと」と解釈しているのは、先にも述べたようにここでは不適当。また、ウの「世間慣れしている」、エの「疑り深い性格」、オの「はつきりとした意識」はいずれも「おもんばかり」の解釈としては無理があるので、やはり不適当。

問5 文法問題。係り結びの法則についての知識が問われている。係り結びとは、文中に係助詞「ぞ」「なむ」「や」「か」とあると、

結びの語が連体形になり、「こそ」があると已然形になるという文法上の法則のことである。そこで今回の設問に対しては、まず本文中から係助詞を探し、それに呼応する結びの語を見つけることになるが、結びの語は一語であることに注意する。

係り結びの箇所を順に指摘すると、

・「よに貴きことにこそ候ふなれ」

・「五六度ぞ見奉りて候ふ」

・「我も見奉ることもやある」

・「読み給へばこそ、その目ばかりに見え給はめ」

・「聖の目にこそ見え給はめ」

の五カ所である。傍線部が係助詞、二重傍線部が結びの語である。係助詞「ぞ」「なむ」「こそ」は強意を表し、「や」「か」は疑問か反語の意を表す。「我も見奉ることもやある」は、文脈から「自分も拝見することがあるか（拝見することがあるかもしれない）」という意味になるので、ここでの「や」は疑問の意味になる。用意されている解答欄を見て、記入する場所をよく考えること。

4章

【問題】(演習)

出典：『うたたね』／信州大学・改

現代語訳

道中目に止まる場所場所は多いけれど、「ここはどこ、ここはどこ」とも、身近に尋ねられる人もいないので、どここの野も山もただはるばると分けて行ったが、どこに宿をとつたらよいかわからず、一行の人の行くのにまかせてまるで夢路をたどるようであつて、日数が経過するにつれて、やはり慣れない田舎の長い旅路にすっかりやつれた我が身は、自分か他人か区別のつかないような茫然とした気ばかりがして、美濃と尾張の国の境に着いた。

洲俣とかいう、広々とひどく流れの速い大河がある。行き来する人が集まって、舟を休めず往復する様子は、とても仰々しく騒がしく、恐ろしいまでに大声でわめき合っている。やつのことで行の主だった者はみな渡り終えたが、人々も輿だの馬だの来るのを待っている間に、私は河の端に下りてたはずみ、つくづくといま来た方を見ると、見苦しい下賤な男たちが、汚ならしいさまざまな物を舟に積み込みなどするうちに、何事であろうか激しく言い争って、ある者は河に倒れて落ち入りなどするにつけても、見馴れずなんとなく恐ろしいが、このような渡し場のある河までが、都との間をすっかり隔ててしまっているの、いよいよ都の方ははるか遠くなつてゆくことだろうと思うにつけても、いつそう甚だしく涙も流れて堪えがたく、(都に)帰るような時さえわからない不安に、過ぎてきた日数もまだそんなに経たないので、都に残る人々の行く末が気にかかり、恋しい気持ちもさまざまであるが、ここは(『伊勢物語』で有名な)隅田川の河原ではないので、都の人の安否を尋ねるはずの都鳥も見えない。

思ひ出でて……業平のことを思い出して、その名をしきりと慕わしく思う都鳥よ、その都鳥の姿も見えずあとかたも残らない川波に、ひとり都を思つて声をあげて泣こうかしら

問1 (ア) 格助詞

- (イ) 断定の助動詞「なり」の連用形（比況の助動詞「やうなり」の連用形の一部）
 (ウ) 接続助詞

問2 自分の身の衰えを信じられない状態。

〔別解例〕長い旅路の身の衰えに茫然としている状態。

問3 B 〓 大声を出してわめき合っている

D 〓 声を上げて泣こうかしら

問4 作者の、いつ都に帰るかという期日さえわからない不安。

問5 身の終はり

問6 ひな

問7 『伊勢物語』

現代語訳

二十七日。大津から浦戸をめざして舟を漕ぎ出す。このように(帰京)する者の中で、(ある人は)都で生まれた女の子が、任国(の土佐)で急に亡くなってしまったので、近々の帰京のための旅立ちの準備をみても、(気持ちしが沈んでいるために)何も言わない。都へ帰るのに、(ある人は)女の子がいけないことだけを悲しみ恋しがっている。そこに居合わせた人々も(同様に悲しみを)こらえきれない。このような中である人が書いて出した歌、

都へと……やつと都へ帰れると(うれしく)思うはずなのに、何となく悲しいのは、任国の土佐で亡くなってしまい、都と一緒に帰ることのない人(女の子)がいるからであったのだなあ

またある時には、

ある物と……今も娘が生きているものと思ひ、(娘が死んだことを)何度も忘れては、その娘を、どこへ行ったのかと探すことは悲しいことであつたなあ

とうたっている間に、鹿児の崎という所に、国司の兄弟、さらに、その他の人の誰やかれやが、酒やら何やらを持って追いかけて来て、磯に馬から下りて座って、別れ難いという思ひを(ある人に)言う。国司の官舎の人々の中で、この(見送りに)来た人々こそ、誠意があるというように、自然と口に出し声をひそめる。このように別れ難い思ひを言って、見送りに来た人々が、漁師がみんなで力を合わせて網を担い出すように、この海辺で全員で声を合せて歌い出した歌、

をしと……別れるのが名残惜しいと思ふあなたが(もしかするとこの土地に)留まってくれるかもしれないと思ひ、葦鴨のように、大勢でやって来たのですよ

とうたつて(ずっと)そこにいたので、とてもはなはだしく感動し、都へ帰る人(ある人)が詠んだ歌、

棹させど……棹をさしても、その底の深さを計り知ることができない海のように、深い思ひやりのある心をあなた(たち)に感じることだなあ

と云ううちに船頭はしみじみとした趣もわきまえずに、自分は酒を飲んでしまったので、早く出てしまおうとして「潮が満ちてしまった。風もきつと吹くにちがいない。」と騒がしくせきたてるので、(仕方なく都へ帰るある人が)舟に乗ってしまおうとする。このときに、そこに居合わせた人々は、別れの時に応じ漢詩など、その場にふさわしいものを朗詠する。また、ある人が、(ここは)西国であるのに、(東国地方の)甲斐の民謡などを(場違いに)うたい、このように歌うのに、「歌の声に感動して」舟屋形に積もった塵も舞い上がり、空を流れる雲もそこに漂っていたよ」と言っているようだ。今夜は浦戸に泊まる。藤原のときざねや橘のすえひらや、他の人々が後を追いかけてきた。

解答

問1 い

問2 京にて生まれたりし女子

問3 都へ帰る人との別れを惜しみ見送りにやって来た人々の誠意ある深い思いやりのある心。

問4 a 意志の助動詞「ん(む)」の終止形

b 推量の助動詞「べし」の終止形

c 推定の助動詞「なり」の連体形

問5 ゆく人

問6 ① 紀貫之

② 土佐日記

問1 主語を確認する問題である。傍線部(イ)の前に、この歌が詠まれた事情が述べられている。都をめざし「ある人」(歌を詠んだ人)を含む人々が舟を漕ぎ出すが、京の都で生まれた女の子(ある人の娘)がこの任国の土佐の地で亡くなってしまい、一緒に連れて帰ることができず、ある人をはじめとしてそこに居合わせた人々も皆嘆き悲しんでいる。このような事情の中で「ある人」が詠んだ歌の中で示された「帰らぬ人」とは「ある人の娘」のことである。そして(ロ)も、別のあるときに「ある人」が詠んだ歌の中に出てくる「なき人」なので、(イ)と同じ「ある人の娘」である。従って一つだけ指し示す内容が違っているのは(ハ)である。

問2 この問題は、すでに問1を解く段階で同時に理解されている問題である。あとは二つの指し示す同一内容(ある人の娘)を表す表現としてどこを抜き出すか、である。傍線部(イ)・(ロ)ともに上にある修飾部が「帰らぬ」「なき」と言ったように「人が亡くなったことを表すもの」である。従って抜き出す箇所もそのような意味を含んだところがよい。本文では「京にて生まれたりし女子」のところだが、「女子」が都で生まれ、と表現することで過去のことを示し、しかし、それは同時に都では生まれ生きていた女の子だったのに、「ある人」が土佐の国の長官として任官するために一緒に連れて行っていったが、その任国で亡くなってしまい帰京する現在、はもうこの世にはいないのだ、ということを対比的に示している。従ってただの「女子」ではなく説明を受けた「女子」を抜き出す方がよいので「京にて生まれたりし女子」のところが解答となる。

問3 この傍線部(二)も和歌の中に含まれているものを具体化する問題であるので、和歌の詠まれた事情をふまえて答えねばならない。そこでこの歌が、いつ、どこで、誰により、どのような状況や出来事のもとで詠まれたのかを見ていくと、土佐を出発し、しばらくして鹿兒の崎というところについたところ、その地に、自分(ある人)たちと別れを惜しむため追いかけて来てくれた国守の兄弟たちと、「ある人」が別れの宴でやりとりをしていて彼らに対して抱いた思いを詠んだものである。もう少し詳しく見ると、「ある人」を見送るために来た国守の兄弟は、別れの宴で心の底から「別れ難い」思いを述べて、さらに皆で歌った歌は「別れるのが惜しいあなたが、我々が来て引きとめればこの地に留まってくれるかもしれないと思ってここに来ているのです」という内容のもので、単なる社交辞令などではなく、「ある人」はその誠意に感動し、また去りゆくもののできる限りのことをして送り出そうとする姿に彼らの思いやりを感じているのである。それを和歌で海と同様に計り知れないほどの「深い心」と表現していると捉え

て説明する。

問4

①は、ナ行変格活用動詞「去ぬ」の未然形に接続している「ん(む)」であるが、たくさんある意味の中のどれをとるかである。この動作は楫取り自身の動作であるので「意志」でとり、活用形の方は「と」の前なので終止形と判断できる。「と・」とて「など」の前では文が完結しているのが普通である。

②はカ行四段活用動詞「吹く」の連用形に、強意の助動詞「ぬ」の終止形に接続している「べし」であり、これも①と同様に、どの意味でとるか、であるが、「吹く」の動作主は「風」なので「推量」でとり、活用形の方は文末で用いられていることから終止形と判断する。

③はこの三問中もつとも難しい。まず③が接続している「言ふ」が終止形ならば、伝聞もしくは推定の助動詞であり、連体形ならば断定の助動詞である。ここは「ある人」が甲斐歌をうたっているところとそこに居合わせた人々が、その歌を聞いていて、その声に感動していることが、「ある人」には、彼らの語る声で推測されるのである。従って③はハ行四段活用動詞「言ふ」の終止形に接続している推定の助動詞「なり」であり、活用形は上に強意の係助詞「ぞ」があるので連体形である。

問5

傍線部(㊦)の意味は(楫取りにせきたてられ)「舟に乗ってしまおうとする」である。では誰が舟に乗るのか。当然この土佐から離れて行く人であり、それを本文中では「ゆく人」と表現している。

問6

文学史の問題の中には、その書き出しでその作品名を問うという形式のものがあるので教科書に出て来る有名作品の書き出しは知っておく必要がある。

出典：柳宗元『三戒』「永某氏之鼠」／東京学芸大学

書き下し文

是に由りて鼠相告げ、皆某氏に來り、飽食するも禍無し。某氏の室に完器無く、櫪に完衣無し。飲食は大率鼠の余なり。昼は累として人と兼行し、夜は則ち竊み噛み鬪暴たり。其の声万状にして、以て寝ぬるべからざるも、終に厭はず。数歳にして某氏居を他州に徙す。後人來りて居るに、鼠の態を為すや故のごとし。其の人曰く、「是れ陰類の悪物なり。盜暴尤も甚だし、且つ何を以て是に至れるや」と。五六猫を仮り、門を闔ち瓦を撒り、穴に灌ぎ、僮に購ひ羅にて之を捕へしむ。鼠を殺すに丘のごとし。之を隠処に棄つるに、臭数月して乃ち已む。嗚呼、彼其の飽食するも禍無きを以て恒にすべしと為せるか。

現代語訳

そこで鼠たちは（お互いに）知らせあい、皆某氏の家に行って来て、（某氏の家の中で）腹いっぱい食べてもとがめられることはなかった（＝退治されるような災難はおこらなかつた）。（だから）某氏の部屋には（鼠にかじられていない）完全な器物はなく、衣桁にも（穴のあいていない）完全な衣服はかかつていないありさまだった。（そして）飲み物や食べ物ほだいたい鼠の食べ残しであった。（鼠は）昼間はぞろぞろと人について行き、夜になると盗んだりかじったり大暴れした。その音はさまざまにひびき、寝ることができないほどであったが、（某氏は）全く嫌がることはなかった。数年たって某氏は他の州へ引越した。次の人が来てそのあとに住んだが、鼠のふるまいぶりはもとのままであった。その人は言った、「鼠は暗闇で活動する悪党だ。とりわけひどく盗んだり暴れたりする。いったいどうしてこうなるまでになったのだろう」と。（そこで）猫を五、六匹借りてきて、門を閉じ、瓦をはずし、（鼠の棲む）穴に水を注ぎ、下僕に賞金を出して網にかけて鼠を捕獲させた。殺した鼠は小山ほどにもなった。それを物陰に捨てておいたところ、その

悪臭が数か月もかかってやっと消えるほどだった。ああ、鼠たちは腹いっぱい食べてもとがめられないということを、いつまでも続けることができると考えていたのだろうか。

解答

問1 (1) 〓 以前のまま、家中を好き放題に食べまわり、騒ぎ続けた。

(2) 〓 どうして、このように昼でも夜でも家中を走り荒らしまわるといふ状態にまでなったのであろうか。〔いずれも解答例〕

問2 A 〓 ついにいとわず B 〓 すなわちやむ

問3 自分に都合の良い状況がいつまでも続くことはないから、自身の分をわきまえて謙虚に生きることが大切だ。〔49字・解答例〕

書き下し文

呉の許升の妻は、呂氏の女なり、字は榮。升少きとき博徒たり、操行を理めず。榮嘗に躬ら家業に勤めて、以て其の姑を奉じ養ふ。數ば升に勧めて学を修めしめ、善からざること有る毎に、輒ち涙を流して進め規む。榮の父忿り積もり、乃ち榮を呼び改めて之を嫁がしめんと欲す。榮歎じて曰く、「命の遭ふ所なれば、義として離式する無し」と。終に帰るを肯んぜず。升感激して自ら勵み、乃ち師を尋ねて遠く学び、遂に以て名を成す。尋いで本州の辟命を被り、行きて寿春に至らんとし、道に盜の害する所と為る。刺史尹燿盜を捕へて之を得(「得たり」)。榮喪を路に迎へ、聞きて州に詣り、讎人に甘心せんことを請ひ、燿之を聴す。榮乃ち手づから其の頭を断ちて、以て升の靈を祭る。

現代語訳

呉の許升の妻は、呂氏の娘であり、字(「呼び名」)は榮(である)。(許)升は若いころ(は、まともな職にも就かない)ばくち打ちだったのであり、素行を磨かなかつた(「素行不良であつた」)。榮はいつも自分から進んで(嫁ぎ先の)家の仕事に精を出し、(仕事にいそむことに)よつて彼女の姑に仕えて世話をした。(また)たびたび(許)升に勧めて学問を習得させ(ようとしたが、許升は聞き入れもせず)、(許升が)よくないことをすることに、いつも涙を流してその前に進み、諫め(て懸命に素行を正すよう説得する)。榮の(実の)父は憤りが鬱積し、そこで(娘の)榮を(実家に)呼び返して再度彼女を(別の男と)結婚させようとした。榮は溜め息をついて言うことには、「(夫の許升とは)運命が会わせたまのなので、人の守るべき道として(許升と)別れることはありません」と(言った)。(榮は)とうとう(実家に)帰ることを承知しなかつた。(これを聞いた許)升は感激して自分から(改心して)奮い立ち、そこで(学問の)師を求めて遠くに遊学し、かくして(学問を修めたことに)よつて名声を得た。まもなく(許升は)故郷の(呉)郡からの取り立てを受けて、(遊学先から故郷へと)旅して(安徽省の)寿春(の町)に到達しようとし(たのだが)、途中で盜賊に殺されることとなつてしまつた。州郡を監察する役人の尹燿が(許升を殺害した)盜賊を逮捕して身柄を拘束していた。榮は(許

升の) 柩を往来で迎えて(もらい受け)、(その場で犯人逮捕の話を) 聞いて(そのまま尹燿のいる) 州(の役所) に参上し、仇に対し
て思う存分に恨みを晴らしたい(という) ことを願い出て、燿はそ(の栄の仇打ちの願い) を聞き入れ(て認め) た。栄はそれで自分
の手でその(犯人の) 首を斬り落として、それを(亡き許) 升の霊前に供えて(許升を) 弔った。

解答

問1 (a) ㊦あざな

(b) ㊦しばし 「ば」

(c) ㊦すなわ 「ち」

問2 1

問3 3

問4 許升は帰郷の道中で盗人によって殺された。〔20字・解答例〕

問5 2

問6 1

解説

問1 訓読の問題。(a)は「あざな」と訓み、「呼び名・別名」の意味。ここでは「許升の妻」 ㊦ 「呂氏の娘」という人物についての紹介があり、その人の「字」が「栄」であるとされている。以降の文ではこの人が「栄」と呼ばれており、ここでは「呼び名」の意味であるとわかる。(b)については、直後の「勸」を修飾している(つまりは副詞的な用法である)ことから「たびたび・数多く」の意味であると推測できる。この意味にあてはまる訓読みで、「バ」という送り仮名に合うのは「しばしば」。(c)は「すなはち」と訓み、「いつも・そのたびごとに」の意味を持つ字である。ここでは「平仮名・現代仮名遣い」と指示されているので「すなわ

(ち)でよい。なお、同じ訓読みを持つ字に「則」「即」「乃」「便」などがあるが、いずれも意味は微妙に異なる。各自調べておかれるとよい。

問2 問1の(c)との関連で考えれば、この部分が「……たびごとに」「……するといつも」の意味であることが推測でき、その意味に
適う選択肢1を選ぶことができる。

この「輒」のニュアンスがわからずとも、漢文の文型・語法についてのちよつとした知識があれば、選択肢をより分けていく程度の作業は可能である。そもそも「不」は必ず直後の語を打ち消すはたらきを持つ返読文字であるから、「不善」はひとまとまりの語となる。したがって3のように「不」と「善」を離して訓む書き下しはあり得ない。また、この傍線部分においては動詞的なはたらきをする文字が「有」であるから、その後の「不善」はこの「有(あり)」の目的語もしくは補語となる。いずれにしてもこの「不善」は名詞句であり「よからざること」と訓むのが適切だ、というふうに判断できる。その意味で選択肢2・4は不適切。

問3 問2と同様に返読文字「不」の用法に注目。これは必ず直後の語を打ち消すはたらきを持っているのだから、ここでは「肯」をしなかった、という意味になる。「肯」は「がえんズ」と訓み、「承諾する」「イエスの返事をする」の意味を持つ。「肯定」「首肯」などの熟語を想起されたい。したがって「不肯」は「承諾しない」ということ。この意味に相当する内容を持つ選択肢は3(「承知しなかった」)。1の「相談しようとはしなかった」や2の「もう実家に帰らなかつた」や4の「帰ろうとはしなかった」ではいずれもこのニュアンスを欠く。

あるいは、傍線部冒頭の「終」が「つひニ」と訓み、「最終的に」「結局は」の意味であることから選択肢が絞れていく。1の「とうとう」や3の「結局」はこの意味に適合しているが、2の「そう言うてから」や4の「無理に」ではこの意味を欠く。

このように、部分解釈の選択肢問題にあたっては、傍線部分(およびその関連部分)のあるポイントに注目し、そのポイントの内容に相当することがあるか否か……で選択肢をより分けていくとよい。たいていは、正解の選択肢を軸にして、他の選択肢は少しずつ少しずつ外れているものである。

問4 現代語訳を書くに際して注意したいことは、「逐語訳を基本にする」ということだ。書き下し文の語順は変えず、まずは一対一の置き換えを試みてみる。そしてできた訳文に不自然なところがあつたり、意味が判然としないところがあつたりした場合には、適宜他の語を補うか、意味を変えずに言い換えるか、を試みればよい。

ここでは「道」↓「盗」↓「害」↓「所」↓「為」の順に口語に置き換えていくことになるわけだが、注意したいのは「為A所B」の受身の句形が用いられていることである。「所」が受身の助字。これは「AによってBされる」という意味の、定型的な表現である。したがって、この意味は、「道」で「盗」によって「殺」された、ということになる。これを軸に、適宜表現を補うなり置き換えるなりしていけばよい。

「道」とは、直前の「本州辟命、行至寿春」という表現から推せば、故郷の町・寿春へ向かう道すがらの意味であるとわかる。また、この部分の主語は前行にあるように「升」。したがって「許升が帰郷の道中で」というふうにするれば、意味がクリアになる。「盗」は、直後に「刺史尹燿」がこの「盗」を捕らえたという記述があることから推して「盗人」「盜賊」等の意味に取るのが妥当であろう。

問5 選択肢がいずれも「みち」「ひつぎ」「むかへ」という語を含んでおり、これらがそれぞれ「路」「喪」「迎」に相当している。訓読をするにあたっては、素直に返り点の振られておりに読んでいけばいい。「喪」↓「於」↓「路」↓「迎」となる。この「路」↓「迎」を「みちにむかへ」ときちんと訓んでいる選択肢は2しかない。

問6 直前に「榮」が「請甘心讎人」、つまりは「かたきに対して思う存分怨みを晴らす」ことを希望し、「燿」がそれを許した、とする記述があることに注目。その上で「榮」が「其」の頭を断ち切った、というのだから、ここでいう「其」とは「讎人」を指すことになる。夫・許升を殺した相手の盗人を仇に思う「榮」は、自らその相手の首を切るといふ私刑に打って出たのである。



会員番号	
------	--

氏名	
----	--